千刈狸の呟き

～ 車検と健診 ～

みなおし狸

私は２台の車を持っており、一台は自分の通勤用、もう一台は妻が買い物などで使っている。先日、相次いで２台の車を点検に出すことがあった。あるパック商品（初車検とそれまでの３年間の１年点検と６か月点検の費用を先払いする）を営業マンの勧めで購入していたからだ。私は通勤で毎日100km弱走るので、頻繁の点検もやむなしと思うが、妻の車は走行距離が短く新車なので、こんなに頻回に点検しなければならないのか疑問に思った。

車検は必要か？という議論がある。車検のない国もある一方、法律で定められた日本の車検制度は、ユーザー負担が非常に大きい。それは、車検時に税金と自賠責保険が加算されるため値段が高いこと、その車検と点検が頻回にあるからである。

車がよく故障していたころの1951年にできた車検制度は、1973年になると軽自動車にも導入された。その後、自動車産業は目覚ましい発展を遂げ、最近の車が高性能でめったに故障しないことは誰もが自覚している。車が日常生活の高額な必需品となっている現在、車検制度を見直そうという声が上がるのも当然だろう。

車検が必要な科学的根拠はあるのか、調べてみた。車検が交通事故を防いでいるか否か、を論じた科学論文は多々あるものと期待してネットで探したら、その少なさに唖然とした。Google検索で出てきたのはわずか２編だった。そのひとつは、交通事故総合分析センターの報告で、平成18年に全国で発生した交通事故832,454件の原因の多くはヒューマンエラーで、整備不良が要因となった事故はわずか140件、その多くはトラック関連だった。もう一編は報告時期不明だが東京工業大学の斎藤が計量分析により、1973年の車検制度導入は交通事故率を低下させなかった、というものだった。

これらの論文は現行の車検、点検は見直してよい、という根拠になるものである。が、そういう方向にはいかないようだ。その主たる理由は、「自動車整備業界の保護」といわれている。

今の私の仕事の一部に健診業務がある。健診と車検は対象が人か車の違いがあっても、その内容やシステムに共通点があるように思える。健診の目的は、健康状態を確認し病気を予防することだが、これを法律に基づいて半強制的に行っている国は日本以外にないらしい。健診は必要ない、と主張する人がいるのもなにやら車検と似ている。

欧米で日本のような集団健診をやらなくなったのは、多くのデータに基づいた解析結果から、その有用性が否定されたからである。たとえば、国際的に最高水準の医学論文の系統的総説とされるコクランレビューによれば、元々の症状がない人々を対象とした健康診断には総死亡率を減らす効果はなく、また、がんや循環器疾患による死亡率を減らす効果もないという。

一方、合理性重視の西欧では、健診とは似て非なる検診（特定の病気を検査し早期発見するのが目的）はよくやられている。健康管理も個人主義の色彩が強く、個人の体質や年齢に合わせ、担当医や主治医と一緒に計画し施行されている。健診もあるにはあるが、日本のような血液検査やレントゲン検査はなく、問診やカウンセリングが主体で費用は保険でカバーしているという。

日本でも胃がん・肺がんなどのがん検診は個人の希望でやられるが、集団健診との境がわかりにくくその受診率は西欧に比べて格段に低い。例えば婦人科がん検診の受診率は西欧80％に対し40％である。日本人の健康意識が低いわけでもなく（意識の高さはサプリ全盛からも知れる）、負担額が高いからでもないのになぜだろう。思うに、誰でもどこでも安価に医療を受けられるという国民皆保険があるからではないか。事実、日本の医療機関受診率はOECD平均の２倍と高く、これが健診/検診の地位を曖昧にしているのかもしれない。病院で治療中の人が集団健診も受けるのはよく目にするが、これは不合理で無駄だ。

かつて数十年前は、健診は老若何女を問わず上半身は裸で視診聴診打診も丁寧だったと記憶しているが、今はプライバシー重視、時間短縮の観点からか、聴診器はシャツの下からそっと入れて診ることが多い。それでもいいと思っている。基本的に毎年診る健常者なので異常所見の確率は低く、もし異常があればすでに医療機関を受診していることが多いからだ。

集団健診は見直す時期に来ているかもしれないが、そうなる気配はなさそうだ。車検と同じように「業界の保護」があるのだろうか。健診データの血圧、コレステロール、血糖の基準値が最近厳しくなったのは、なるほど業界の陰謀か、と思わぬでもない。他方、当院のように健診が経営の一端を担う大事な業務になっている病院は多く、私自身もその上がりで禄を食んでいる。それを思うと、あまり強いことは言えなくなる。

病気予防を目的とする健診について思いを巡らしているとき、戦禍で一瞬にして多くの人命が失われたとのニュースが耳に入ってきた。複雑な気持ちである。